

## [外国語]

## 英語ノートを活用した外国語活動の工夫と高学年児童の意識への影響

茂木 淳子\*

### 1 研究の背景

平成23年度の外国語活動本格実施を前に、多くの学校で移行措置としての外国語活動の取組がなされている。21年度、公立学校の97.8%で外国語活動を実施しており、そのうちの半数以上が第5・6学年で35時間の授業時数を確保している(文部科学省, 2009a)。また、22年度に外国語活動を実施する予定の学校は98.7%であり、第5・6学年での35時間以上の実施は、68.4%の学校が予定している。

これまで、総合の時間を活用して英語活動に取り組む学校が多かったとはいえ、本格実施となれば、現場の混乱は免れない。当面の課題は、「指導のためのカリキュラム」や「指導する教員の英語力」、「教材の開発や準備のための時間」など指導者側のものがほとんどである(ベネッセ, 2008)。一方、同調査によれば、「子どもの積極性」が課題であるとする学校は全体の1%に過ぎず、ほとんどの教員は「子どもたちは、英語活動を楽しみにしており、英語に興味をもつようになってきている」ととらえている。しかし、実際には、教師の認識と児童の意識の間には、多少の温度差がある。「英語が好きか」という質問項目について、肯定的な回答をした児童の割合は、5年生72.2%に対して、6年生は66.2%と下回っている(国立教育政策研究所, 2009)。

外国語活動は英語嫌いを生み出さないことを基本理念(文部科学省, 2004)としている。小学校における外国語活動の経験は、中学校での英語教育において情意面に肯定的な影響を及ぼす(酒井ら, 2009)ばかりでなく、高等学校でも影響を及ぼすことから、小学校以前で培われた肯定的情意の持続が必要とされている(長沼ら, 2008)。しかし、中学校に入る前に「英語が好き」であり、「中学校で英語を学ぶことが楽しみだった」生徒は50%に達していない(吉田, 2009)。その原因について吉田(2009)は、小学校時代の英語の学習内容が影響している可能性が高いことを推測している。

現在、全ての小学校5, 6年生に英語ノートが配布されており、その活用度も低くはない(ベネッセ, 2009)。この英語ノートは各学校における取組のばらつきを是正し、質的水準を確保するための共通教材として提供されたものである(文部科学省, 2009b)。しかし、授業案は例に過ぎず、児童の実態に合わせて工夫改善することが求められている。したがって、実際にどのような活動が展開されているのか、その結果によって児童がどのような意識をもつのかは、不明確である。

### 2 研究の目的

本稿では、英語ノートを活用した外国語活動の実際と児童の意識の変容に焦点を当て、小学校における外国語活動が及ぼす効果・影響について、以下の2点を明らかにすることを目的とする。

- ① 英語ノートを活用した外国語活動を経験した児童の、学年の意識の違い
- ② 同児童の、長期的に見た意識の変容

### 3 研究の方法

(1) 実施時期：5, 6年生ともに年間35時間。週に1回の外国語活動を実施した。

平成20年度(2008年4月から2009年3月まで)

平成21年度(2009年4月から2009年12月まで)

\* 上越市立大手町小学校

(2) 参加者：参加者は5，6年生児童，173名である（表1）。

表1 児童数内訳

	5年生	6年生
20年度	A学年 (N=64)	B学年 (N=51)
21年度	C学年 (N=59)	A学年 (N=64)

(3) 指導内容と授業形態：英語ノート1・2を学級担任とALTによるティームティーチングで指導する。

(4) 活動内容：

学級担任は，児童の実態を把握しているという観点から，授業の「設計・実施・評価」の3段階において，その役割を果たすことが求められている（文部科学省，2008）。そこで，英語ノート指導資料（文部科学省，2009b）をもとに，児童の実態を考慮し，筆者が再編し直した活動計画を使用した。

英語ノートのそれぞれの単元は，聞く活動から話す活動へという流れで構成されている（表2）。

表2 例) 行ってみたい国を紹介しよう Lesson 6 英語ノート2

第1時	Let's listen 1	Let's listen 2	Let's chant	
第2時	Let's chant	Let's listen 1	Let's play	Let's listen 2
第3時	Let's chant	Let's listen	Activity 1	
第4時	Let's chant	Activity 1	Activity 2	

\*太字が聞く活動

小学校外国語活動研修ガイドブック（文部科学省，2008a）によれば，「歌やALTの話等を利用して，じっくり聞かせる活動を優先し，それに基づいて話す活動へと進めていくことが望ましい」とされている。「形式的正しさよりも，メッセージの意味を理解すること（インプット）を重視した学習が重要」（白井，2008，p135）であることから，聞く活動から話す活動へという流れは，理にかなっているといえる。そこで，聞く活動から話す活動へという流れを崩さずに，授業を「設計・実施・評価」した。


(5) 測定具：外国語活動に関する意識調査：下記の3項目からなるアンケート


（5：はい，4：少しはい，3：どちらでもない，2：少しいいえ，1：いいえ）

- ① 英語を話せるようになりたいですか（5件法）
- ② 英語を勉強するのは楽しみですか（5件法）
- ③ 英語の授業に積極的に参加していますか（3件法）

(6) 分析方法：分散分析によってアンケートの分析を行った。

(7) 活動例 6年生 英語ノート2 Lesson1 「アルファベットで遊ぼう」（1/3時）

児童の活動	学級担任	ALTの活動	指導上の留意点
・あいさつをする。	・全体にあいさつをする。		・元気よく
<b>【Let's Listen】</b> ・アルファベット絵本を楽しむ。 	・ABC3D（アルファベット絵本）を見せる。 	・Alphabet City（アルファベット絵本）を見せる。	・どこにどんなアルファベットが隠れているか，予想させる。
ABC3D：Marion Bataille New York：Roaring Brook Press 2008年 Alphabet City：Stephen T.Johnson New York：Viking 1995年			

<p>【Let's sing】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>大文字アルファベットカードを見ながら、一緒に歌う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>アルファベットの大文字を紹介しながら、大文字のアルファベットカードを黒板に貼る。</li> <li>アルファベットソングを歌う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>MとN, LとR, BとVなどの発音の違いに気付かせる。</li> </ul>	
<p>【Activity】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>指導者の言うアルファベットを絵の中から探す。</li> <li>ワークシートにターゲットとなるアルファベットを書く。色が分かれば、その色を塗る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>アルファベットを見つけるゲームをすることを告げる。</li> <li>① ターゲットとなるアルファベットを告げる。例：「ABCを見つけましょう。」</li> <li>② 英語ノートp. 4, 5ページを1分間見る。</li> <li>③ 英語ノートを閉じる。</li> <li>④ ワークシート（下図）にABCを書き込む。色を覚えていたら、その色を塗る。</li> </ul> 	<ul style="list-style-type: none"> <li>同じルールで、アルファベットを探す活動を繰り返す。制限時間を短くしたり、1回に探すアルファベットを増やしたりする。</li> </ul>	
<p>【Let's play】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>キー・ワード・ゲームをする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>キー・ワード・ゲームをすることを告げる。</li> <li>児童と一緒にリピートする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>発音を聞かせる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>難しい発音は、ALTの口元をよく見せるようにする。</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>本時の振り返りをする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>振り返りカードに記入し、ALTに渡すことを告げる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>カードを受け取り、あいさつをする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ALTと一人一人かかわれるようにする。</li> </ul>

#### 4 研究の成果

##### (1) 学年の意識の違い

アンケート項目3種類の回答結果を集計し、平均(M)と標準偏差(SD)を求め、以下の表3に示した。また、分散分析の結果を表4に示す。

表3 学年別アンケート集計結果(事前:各学年開始時 事後:各学年終了時)

項目	内 容		5年 (N=122)		6年 (N=117)	
			M	SD	M	SD
1	「英語を話せるようになりたいですか」(5件法)	事前	4.32	1.03	4.32	1.24
		事後	4.19	0.97	4.37	0.99
2	「英語を勉強するのは楽しみですか」(5件法)	事前	3.92	1.29	4.06	1.19
		事後	4.34	0.93	3.62	0.92
3	「英語の授業に積極的に参加していますか」(3件法)	事前	2.43	0.59	2.24	0.53
		事後	2.82	0.50	2.68	0.53

項目1「英語を話せるようになりたいですか」では、「学年×事前事後」の分散分析の結果、交互作用は有意でなかった ( $F(1,237)=1.23, ns$ )。また、学年間での違いはなく ( $F(1,237)=0.67, ns$ )、事前と事後の比較でも有意差は見られなかった ( $F(1,237)=0.24, ns$ )。平均 ( $M$ ) がいずれも4以上であることから、5年生6年生ともに、「英語を話せるようになりたい」という気持ちを維持しており、学年間の違いは認められなかった。

項目2「英語を勉強するのは楽しみですか」では、交互作用が有意であった ( $F(1,237)=22.00, p<.01$ )。そこで、事前事後の単純主効果を検定したところ、事前では有意差はみられなかった ( $F(1,237)=0.68, ns$ ) が、事後では有意差があり ( $F(1,237)=36.64, p<.01$ )、5年生の平均が6年生の平均を有意に上回った。学年の単純主効果を検定したところ、5年生では、事前より事後の平均値が有意に上回った ( $F(1,237)=10.34, p<.01$ ) のに対して、6年生では事前より事後の平均値が有意に下回っている ( $F(1,237)=11.68, p<.01$ )。つまり、5年生は一年間の活動を通して、英語を勉強するのがもっと楽しみになったのに対して、6年生では以前ほど楽しみではなくなっている実態が明らかとなった。

項目3「英語の授業に積極的に参加していますか」では、交互作用は有意でなかった ( $F(1,237)=0.44, ns$ )。群の主効果(学年の違い)が有意であったため ( $F(1,237)=9.38, p<.01$ )、学年ごとに再分析をした。5年生では、事前の平均より事後の平均が有意に上回った ( $F(1,121)=39.91, p<.01$ )。6年生でも同様に、事前の平均より事後の平均が有意に上回った ( $F(1,116)=47.12, p<.01$ )。どちらの学年でも、学年当初に比べ、より積極的に参加することができるようになったと実感している様子が伺える。

## (2) 長期的に見た児童の変容

A学年 ( $N=64$ ) の児童の2年間の推移を分析する。

アンケート項目3種類の回答結果を集計し、平均 ( $M$ ) と標準偏差 ( $SD$ ) を求め、以下の表5に示した。また、分散分析の結果を表6に示す。

表5 A学年(2年間)のアンケート集計結果

項 目			5年春	6年春	6年夏	6年冬
1	「英語を話せるようになりたいですか」(5件法)	$M$	4.05	4.31	3.97	4.27
		$SD$	1.40	1.10	1.24	0.91
2	「英語を勉強するのは楽しみですか」(5件法)	$M$	3.63	4.3	3.25	3.64
		$SD$	1.41	1.10	1.09	0.84
3	「英語の授業に積極的に参加していますか」(3件法)	$M$	2.38	2.86	2.39	2.66
		$SD$	0.48	0.43	0.49	0.60

表6 A学年(2年間)のアンケート分散分析結果

項 目		$F(3,189)$	$p$	LSD法による多重比較
1	「英語を話せるようになりたいですか」(5件法)	2.13	$ns$	5年春=6年春=6年夏=6年冬
2	「英語を勉強するのは楽しみですか」(5件法)	12.37	**	6年夏<5年春=6年冬<6年春 ( $Mse=1.01, p<.05$ )
3	「英語の授業に積極的に参加していますか」(3件法)	17.57	**	5年春=6年夏<6年冬<6年春 ( $Mse=1.09, p<.05$ )

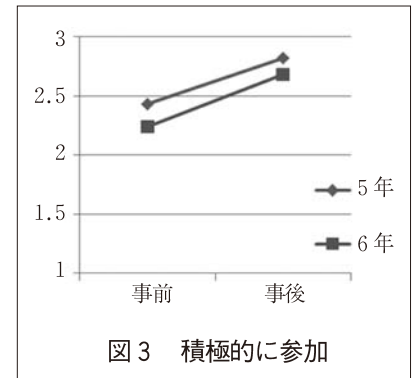
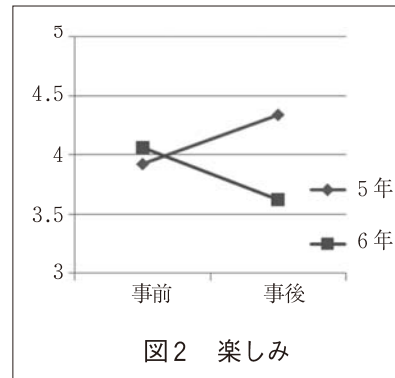
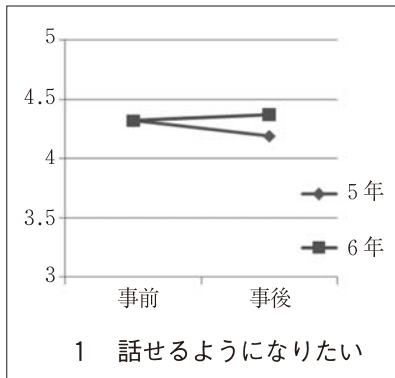
\*\* $p<.01$

項目1「英語を話せるようになりたいですか」では、分散分析の結果、有意差がなかった ( $F(3,189)=2.13, ns$ )。表6に示す通り、平均値が5点満点で4点前後であることから、2年間を通して、「英語を話したい」という気持ちに変化がなかったといえる。

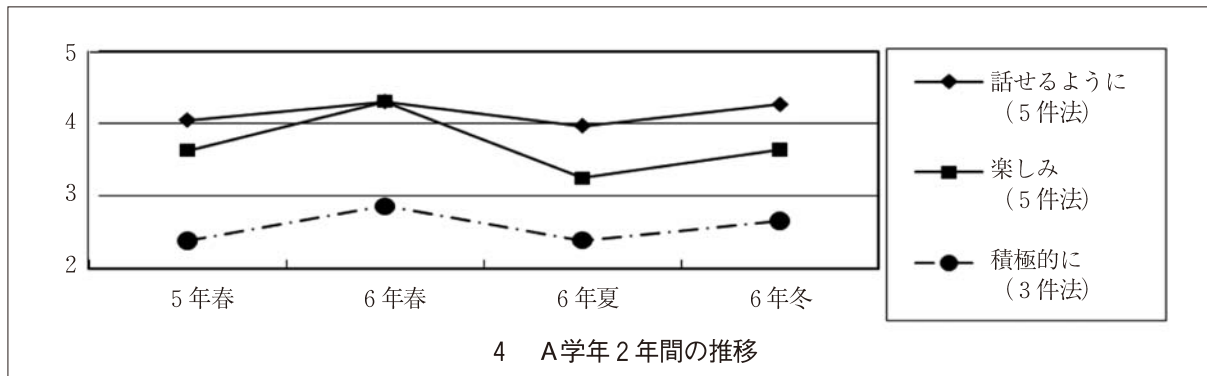
項目2「英語を勉強するのは楽しみですか」では、分散分析の結果、有意であった ( $F(3,189)=12.37, p<.01$ )。LSD法による多重比較の結果 ( $Mse=1.01, p<.05$ )、6年春が最も高く、6年夏は最も低かった。また、5年春と6年冬には違いがなかった。

項目3「英語の授業に積極的に参加していますか」では、分散分析の結果、有意であった ( $F(3,189)=17.57, p<.01$ )。LSD法による多重比較の結果 ( $Mse=1.09, p<.05$ )、6年春が最も高く、6年冬はその次に高かった。また、5年春と6年夏には違いがなく、ともに低かった。

## 5 考察



4 (1)の結果から、次のようにまとめることができる。「英語を話したい」という気持ちは、どちらの学年も同じように高い (図1)。「英語を勉強するのは楽しみか」という点に関しては、5年生では、楽しみ度が増しているのに対して、6年生では年度当初よりも楽しみ度が減少している (図2)。5年生にとっては、前の学年での数ヶ月に1回しかないような特別な英語ではなく、毎週ALTとともに歌やゲームで過ごす時間が楽しみなこととしてとらえられたのであろう。しかし、同じような活動を2年も続けることに慣れ、飽きてしまうと、楽しみにする気持ちが薄れるのは避けられないことである。また、「積極的に参加」しているかどうかについては (図3)、5年生は「英語を話したい」気持ちがあり、「英語を楽しみ」にしているのであるから、「積極的に参加」するのは、自然なことである。一方、6年生は次第に「英語が楽しみ」ではなくなっていく傾向にある。しかし、外国語活動の中で、ペアを組んだり、グループで活動をしたり、タスクを与えられたりするため、「楽しみ」ではないが、より「積極的に参加」するようになったと自覚していることが明らかになった。



4 (2)の結果から、5年生のときの好意的な評価が、いつ低下するのかということが明らかとなった (図4)。

5年生の春、期待とともにスタートした外国語活動は、5年の終わり (6年春) に最も好意的な評価を得る。新たに始まった外国語活動が楽しみで、積極的に取り組めるものであったといえる。しかし、スタート当初の楽しさは、いつまでも持続するわけではない (渡辺, 2008)。6年生にとっての外国語活動は、本実践の方法では「自信」がつかず、「英語を話せるようになりたい」という気持ちが満たされることはなかったのではないだろうか。

本実践は、英語ノートを活用し、「聞く活動」から「話す活動」への移行をスムーズにすることを大切に活動を展開したものである。この方法は、外国語活動を本格的に始める5年生を英語嫌いにさせない有効な方法であったといえる。しかし、外国語活動2年目を迎える6年生にとっては、もの足りなさを感じさせるものだったのかもしれない。ベネッセ (2010) の調査によれば、小学校での英語の授業や活動について「内容が簡単だった」と感じる中学生は7割強であった。また、3割程度の生徒は「もっとたくさん英語を話したかった」「もっとたくさん英語の文やアルファ

ベツトを書きたかった」と回答している。つまり、楽しいだけでない、ある程度のスキルの習得を6年生の児童は期待し、「英語が話せる」自分になることを願っていることが推測される。

## 6 今後の課題

外国語活動の本格実施に伴い、小中連携が必要とされている（文部科学省，2008b）。その方向性を見出すとともに、6年生の意欲を低下させない外国語活動の在り方を探り、その効果について検証する必要がある。

## 引用文献

- 国立教育政策研究所 「小学校における英語教育の在り方に関する調査研究」，2009年
- 酒井英樹・福本優美子 「小学校英語活動の経験と中学生の英語学習に対する意識との関係」『ARCLE英語教育調査データ』，2009年，2010年1月26日検索。  
<http://www.aracle.jp/research/edu-english/data/pdf/0015-1.pdf>
- 白井恭弘 『外国語学習の科学：第二言語習得論とは何か』 岩波書店，2008年，135.
- 長沼君主・森下みゆき 「小学生以前の英語学習の持つ高校時における情意的効果の探索的研究」『ARCLE英語教育調査データ』2008年，2010年1月26日検索。  
<http://www.aracle.jp/research/edu-english/data/pdf/0014-1.pdf>
- 文部科学省 『中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会外国語専門部会（第4回）議事録・配布資料』，2004年，2007年3月25日検索。  
<http://www.mext.go.jp/b-menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryu/015/04070501.htm>
- \_\_\_\_\_ 『小学校外国語活動研修ガイドブック』，2008年a，27p
- \_\_\_\_\_ 『中央教育審議会答申（平成20年1月17日）幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について』，2008年b，2010年9月20日検索。  
<http://www.mext.go.jp/a-menu/shotou/gaikokugo/kanren/toushin.htm>
- \_\_\_\_\_ 「平成21年度公立小・中学校における教育課程の編成・実施状況調査（C票）の結果について」，2009年a，2010年1月24日検索。  
[http://www.mext.go.jp/a-menu/shotou/new-cs/\\_icsFiles/afieldfile/2009/08/11/1269841-3-2.pdf](http://www.mext.go.jp/a-menu/shotou/new-cs/_icsFiles/afieldfile/2009/08/11/1269841-3-2.pdf)
- \_\_\_\_\_ 『英語ノート1・2指導資料』，2009年b
- 吉田研作 「『中学校英語に関する基本調査』から示唆されるもの」 『第1回中学校英語に関する基本調査報告書』 Benesse教育研究開発センター，2009年，2010年1月26日検索。  
<http://benesse.jp/berd/center/open/report/chu-eigo/hon/pdf/data-02.pdf>
- 渡辺 研 「小学生を英語嫌いにならないために」 『教育ジャーナル』12月号，2008年，47-9.
- Benesse教育研究開発センター 『小学校英語・拠点校の取り組みに関する調査』 ベネッセコーポレーション，2008年  
<http://benesse.jp/berd/data/dataclip/clip0014/clip0014c.pdf>
- Benesse教育研究開発センター 『調査データクリップ！子どもと教育』 ベネッセコーポレーション，2009年，2010年8月2日検索。  
<http://benesse.jp/berd/data/dataclip/clip0014/clip0014c.pdf>
- Benesse教育研究開発センター 『第1回中学校英語に関する基本調査（生徒調査）・速報版』 ベネッセコーポレーション，2010年，2010年1月27日検索。  
<http://benesse.jp/berd/center/open/report/chu-eigo/seito-soku/soku-03.html>